

# 川崎市感染症情報センター事業報告書

平成27年（2015年）



## 目次

### 第1章 感染症発生動向調査事業

1	感染症発生動向調査事業の概要	2
(1)	調査対象疾患	2
(2)	定点医療機関	2
(3)	運営方法	2
(4)	情報発信	3
2	感染症発生動向	4
(1)	患者情報	4
ア	全数把握対象疾患	4
(ア)	一類、二類、三類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症	4
(イ)	四類感染症	6
(ウ)	五類感染症	7
イ	定点把握対象疾患	8
(ア)	インフルエンザ定点把握対象疾患	8
(イ)	小児科定点把握対象疾患	9
(ウ)	眼科定点把握対象疾患	20
(エ)	基幹定点把握対象疾患	22
(オ)	性感染症定点把握対象疾患	31
ウ	感染症法第14条第1項に規定する厚生労働省令で定める疑似症	35
エ	獣医師が届出を行う感染症と対象動物	35
オ	集団施設における感染症発生情報	35
	集計表	37
(2)	病原体情報	48
ア	インフルエンザ検査状況	48
イ	ウイルス性集団胃腸炎検査状況	48

ウ	麻しんウイルス検出状況	49
エ	その他のウイルス検出状況	49
オ	ウエストナイル熱等媒介蚊のサーベイランス	50
カ	チフス菌等のファージ型別検出状況	51
キ	腸管出血性大腸菌検出状況	51
ク	赤痢菌及びコレラ菌検出状況	52
ケ	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎検査状況	52
コ	結核接触者検診におけるインターフェロング遊離試験	52
第2章 FETP-Kプラン		
1	FETP-Kプランの概要	54
2	平成27年度の取組	54
	別添1 (FETP-Kプラン概要)	57
第3章 感染症情報発信システム (KIDSS)		
1	感染症情報発信システムの概要	60
2	平成27年度の取組	60
	別添2 (川崎市感染症情報発信システム操作マニュアル)	63
	別添3 (学会発表ポスター)	73
第4章 調査研究		
1	研究内容	76
2	学会発表	77
3	論文・報告書等	79
第5章 会議等		
1	会議等	82

2 講師派遣.....	84
-------------	----

資料

・川崎市感染症発生動向調査事業実施要領.....	87
・今、何の病気が流行しているか！.....	110



# 第 1 章

## 感染症発生動向調査事業

## 1 感染症発生動向調査事業の概要

### (1) 調査対象疾患

川崎市における感染症発生動向調査事業は、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」（以下、「感染症法」という。）及び国の定める「感染症発生動向調査事業実施要綱」に基づき、「川崎市感染症発生動向調査事業実施要領（資料参照）」を定め、全数把握対象疾患及び定点把握対象疾患を調査対象としている。

平成 27 年 1 月 21 日から鳥インフルエンザ（H7N9）及び中東呼吸器症候群（MERS）が二類感染症として追加された。

### (2) 定点医療機関

患者定点となる医療機関数は、小児科定点 33 医療機関、内科定点 21 医療機関、眼科定点 7 医療機関、基幹定点 2 医療機関、性感染症定点 7 医療機関、疑似症定点 76 医療機関が設定され、このうち 17 医療機関が病原体定点を兼ねている。なお、小児科定点及び内科定点は、インフルエンザ定点としての機能を担っている。

表 1 感染症発生動向調査事業定点医療機関数（平成 27 年 12 月 31 日現在）

定点種別（対象疾患数）	患者定点数	病原体定点数
小児科定点（12）	33	7
内科定点（1）	21	7
眼科定点（2）	7	1
基幹定点（9）	2	2
性感染症定点（4）	7	
疑似症定点（2）	76	

### (3) 運営方法

全数把握対象疾患は、診断後直ちに（五類感染症（麻しん、侵襲性髄膜炎菌感染症は除く。）は 7 日以内）保健所に届出が行われるほか、小児科定点、内科定点、眼科定点及び基幹定点からの報告は週単位で、性感染症定点からの報告は月単位で行われる。ただし、基幹定点から報告される一部の疾患（薬剤耐性菌による感染症）については月単位となっている。

定点把握対象疾患のうち週単位で報告される疾患については、毎週月曜日から日曜日までに診断された患者を、小児科、内科、眼科の各定点は性別・年齢別の患者数、基幹定点は患者の性別・年齢・検出病原体名等を所定の様式に記入し保健所に送付する。

定点把握対象疾患のうち月単位で報告される疾患については、当該月に診断された患者を、性感染症定点は性別・年齢別患者数、基幹定点は患者の性別・年齢・検体採取部位等を所定の様式に記入し保健所に送付する。

疑似症サーベイランスでは、疑似症定点において報告基準を満たす患者が発生した場合に、症例分類・年齢・性別を所定の様式に記入し直ちに保健所に送付又は症候群サーベイランスシ



ステムへ直接入力する。

医療機関から届いた情報は、保健所において感染症サーベイランスシステム（NESID）に入力し、川崎市感染症情報センターは、保健所からの情報を確認後、国へ送信する。

#### （４）情報発信

患者情報は週単位（月曜日～日曜日）で解析し、感染症サーベイランスシステム（NESID）から収集する全国の患者情報と併せて、週１回「感染症情報」として、市内医療機関、健康安全部、保健所、集団施設（保育園、小学校、中学校）等へ還元している。

また、感染症情報については、川崎市感染症情報センターのホームページ<sup>※1</sup>及び川崎市感染症情報発信システム<sup>※2</sup>（Kawasaki city Infectious Disease Surveillance System : KIDSS）で公開し、医療機関や市民等へ情報を発信している。

さらに、定期的に行われる川崎市感染症対策協議会及び川崎市感染症発生動向調査委員会において、患者情報等の解析内容を還元し、評価を行っている。

※1 川崎市感染症情報センターホームページ URL

<http://www.city.kawasaki.jp/kurashi/category/22-13-8-11-0-0-0-0-0-0.html>

※2 川崎市感染症情報発信システム URL

<https://kidss.city.kawasaki.jp>

## 2 感染症発生動向

### (1) 患者情報

#### ア 全数把握対象疾患

#### (ア) 一類、二類、三類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症

##### a 区別届出数

平成 27 年における一類、二類、三類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症の届出数は表 2 のとおりである。

一類感染症の届出はなかった。二類感染症は結核 320 件の届出があり、急性灰白髄炎、ジフテリア、重症急性呼吸器症候群（SARS）、中東呼吸器症候群（MERS）、鳥インフルエンザ（H5N1）、鳥インフルエンザ（H7N9）の届出はなかった。

三類感染症は細菌性赤痢 3 件、腸管出血性大腸菌感染症 39 件の届出があり、コレラ、腸チフス、パラチフスの届出はなかった。

表 2 区別届出数（一類、二類、三類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症）

	一類感染症	二類感染症		三類感染症					新型インフルエンザ等感染症	指定感染症（鳥インフルエンザ（H7N9）、MERS）*	総数
	エボラ出血熱、クリミア・コンゴ出血熱、痘そう、南米出血熱、ペスト、マールブルグ病、ラッサ熱	急性灰白髄炎、ジフテリア、SARS、MERS、鳥インフルエンザ（H5N1）、鳥インフルエンザ（H7N9）	結核	コレラ	細菌性赤痢	腸管出血性大腸菌感染症	腸チフス	パラチフス			
総数	-	-	320	-	3	39	-	-	-	-	362
川崎	-	-	87	-	-	14	-	-	-	-	101
幸	-	-	48	-	-	1	-	-	-	-	49
中原	-	-	50	-	-	6	-	-	-	-	56
高津	-	-	45	-	-	4	-	-	-	-	49
宮前	-	-	39	-	1	5	-	-	-	-	45
多摩	-	-	29	-	-	2	-	-	-	-	31
麻生	-	-	22	-	2	7	-	-	-	-	31

\*鳥インフルエンザ（H7N9）及び中東呼吸器症候群（MERS）は平成 27 年 1 月 21 日から二類感染症となった。

b 月別届出数

平成 27 年における一類、二類、三類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症の月別届出数は表 3 のとおりである。

結核は 7 月が 35 件と最も多かった。細菌性赤痢は 3 月、8 月、9 月に各 1 件の届出があった。腸管出血性大腸菌感染症は 7 月が 8 件と最も多かった。

表 3 月別届出数

	総数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
結核	320	27	24	21	32	25	31	35	28	19	29	22	27
細菌性赤痢	3	-	-	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-
腸管出血性大腸菌感染症	39	2	1	1	-	2	5	8	6	5	5	1	3

その他の感染症の届出はなかった。

c 年齢階級別届出数

平成 27 年における一類、二類、三類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症の年齢階級別届出数は表 4 のとおりである。

結核は 60 歳以上が 154 件と最も多かった。腸管出血性大腸菌感染症は 60 歳以上が 6 件と最も多く、次いで 15-19 歳及び 30-34 歳が 5 件と多かった。

表 4 年齢階級別届出数

	総数	0-4歳	5-9歳	10-14歳	15-19歳	20-24歳	25-29歳	30-34歳	35-39歳	40-44歳	45-49歳	50-54歳	55-59歳	60歳以上
結核	320	8	0	1	6	8	20	19	19	21	27	19	18	154
細菌性赤痢	3	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	1
腸管出血性大腸菌感染症	39	3	2	3	5	4	1	5	2	1	2	3	2	6

その他の感染症の届出はなかった。

**事例** 中東呼吸器症候群 (MERS) 疑い事例

本市においては平成 27 年に中東呼吸器症候群 (MERS) の疑似症患者が 1 例発生した。患者は中東から帰国した男性で、発熱、咳、呼吸困難の症状を呈し、感染症指定医療機関に入院した。医療機関にて患者検体を採取し、川崎市健康安全研究所及び国立感染症研究所で PCR 検査を実施したところ、結果はいずれも陰性であった。その後患者の症状は改善し、退院となった。

(イ) 四類感染症

平成 27 年における四類感染症の届出数は表 5 のとおりである。

E 型肝炎 2 件、A 型肝炎 2 件、マラリア 1 件、レジオネラ症 17 件の届出があった。

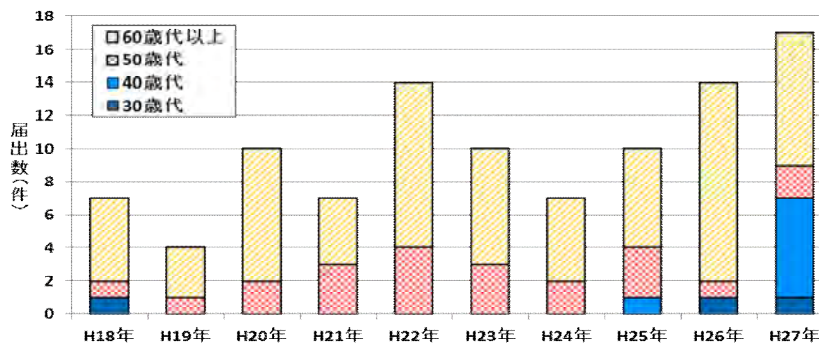
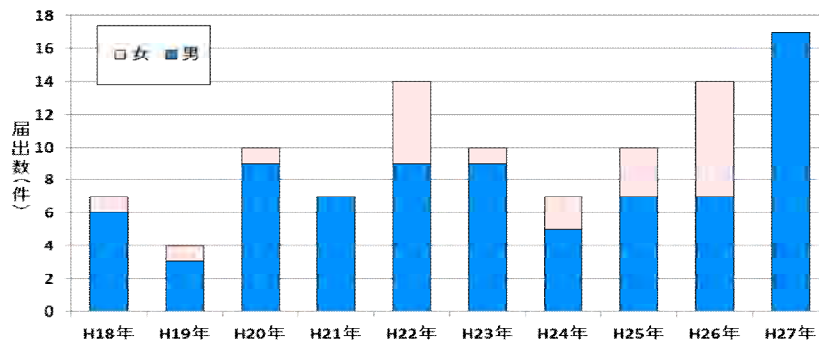
表 5 区別届出数（四類感染症）

	総数	四 類 感 染 症			
		E 型肝炎	A 型肝炎	マラリア	レジオネラ症
総数	22	2	2	1	17
川崎	3	-	-	1	2
幸	3	-	-	-	3
中原	7	-	1	-	6
高津	3	-	-	-	3
宮前	2	1	1	-	-
多摩	4	1	-	-	3
麻生	-	-	-	-	-

その他の感染症の届出はなかった。

※川崎市におけるレジオネラ症の発生状況

平成 27 年は 17 件の届出があり、過去 10 年間で最多であった。性別では全例が男性であった。年齢群別では、平成 26 年以前は 50 歳代以上からの報告が多い傾向にあったが、平成 27 年は 30 歳代～40 歳代からの報告が多くみられた。



(ウ) 五類感染症

平成 27 年における五類感染症の届出数は表 6 のとおりである。

アメーバ赤痢 19 件、ウイルス性肝炎 4 件、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症 26 件、急性脳炎 18 件、クロイツフェルト・ヤコブ病 1 件、劇症型溶血性レンサ球菌感染症 7 件、後天性免疫不全症候群 18 件、侵襲性インフルエンザ菌感染症 4 件、侵襲性肺炎球菌感染症 42 件、水痘（入院例に限る。）4 件、梅毒 49 件、破傷風 1 件、バンコマイシン耐性腸球菌感染症 1 件、風しん 2 件、麻しん 1 件の届出があった。

風しん 2 件及び麻しん 1 件については、いずれも検査診断例として届出があり、抗体価は陽性であったものの、検体採取時期等の問題により、当所における PCR 法による検査結果は陰性であった。

表 6 区別届出数（五類感染症）

	総数	五 類 感 染 症							
		アメーバ赤痢	ウイルス性 肝炎	カルバペネム 耐性腸内細菌科細菌感 染症	急性脳炎	クロイツフェル ト・ヤコブ病	劇症型溶血 性レンサ球菌 感染症	後天性 免疫不全 症候群	侵襲性インフ ルエンザ菌感 染症
<b>総数</b>	<b>197</b>	<b>19</b>	<b>4</b>	<b>26</b>	<b>18</b>	<b>1</b>	<b>7</b>	<b>18</b>	<b>4</b>
川崎	62	2	3	2	4	-	-	10	-
幸	9	5	-	-	-	-	-	-	-
中原	34	5	1	4	3	-	2	2	2
高津	12	1	-	2	-	1	-	1	-
宮前	49	-	-	16	8	-	5	1	-
多摩	22	4	-	2	3	-	-	1	2
麻生	9	2	-	-	-	-	-	3	-
		五 類 感 染 症							
		侵襲性 肺炎球菌 感染症	水痘(入院例 に限る。)	梅毒	破傷風	バンコマイシ ン耐性腸球 菌感染症	風しん	麻しん	
<b>総数</b>		<b>42</b>	<b>4</b>	<b>49</b>	<b>1</b>	<b>1</b>	<b>2</b>	<b>1</b>	
川崎		10	1	30	-	-	-	-	
幸		-	-	3	-	1	-	-	
中原		13	-	2	-	-	-	-	
高津		2	-	5	-	-	-	-	
宮前		7	3	7	1	-	1	-	
多摩		10	-	-	-	-	-	-	
麻生		-	-	2	-	-	1	1	

その他の感染症の届出はなかった。

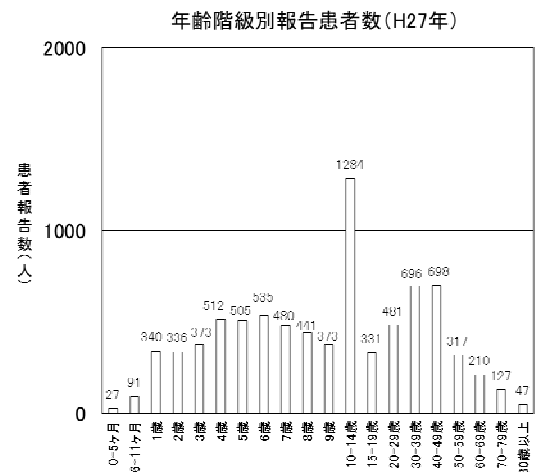
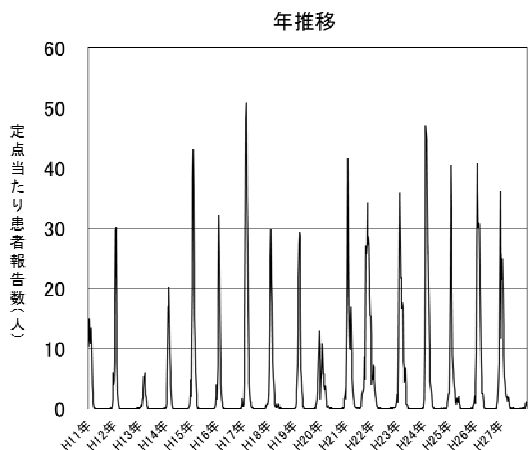
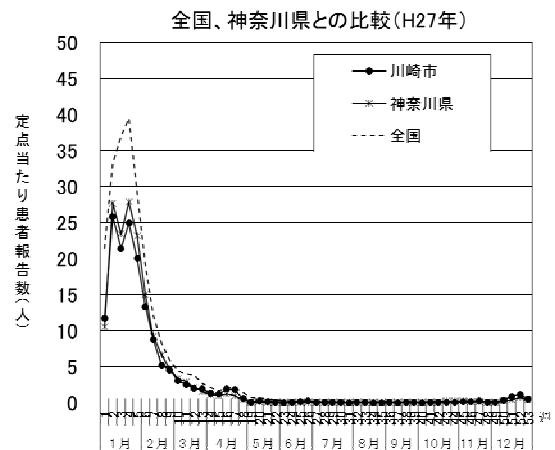
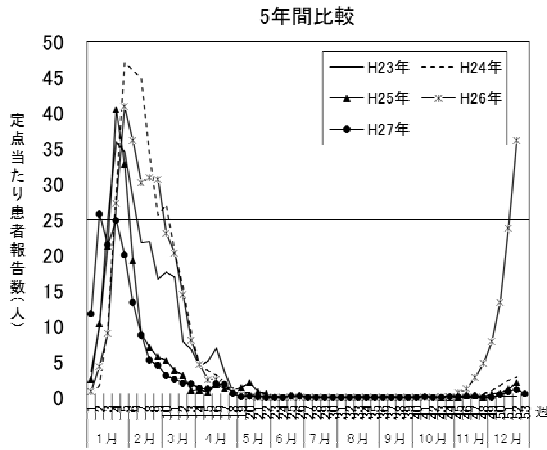
イ 定点把握対象疾患

(ア) インフルエンザ定点把握対象疾患

- ・インフルエンザ

平成 27 年の累積患者報告数は 8,204 人、定点当たり患者報告数は 156.80 人で、前年（380.02 人）と比べて大幅に減少した。2014/2015\*シーズンは、第 52 週（定点当たり 36.01 人）に警報基準値（定点当たり 30.00 人）を超えてピークをむかえたが、第 5 週以降は減少し、第 7 週（定点当たり 8.76 人）に警報終息の目安である定点当たり 10.00 人を下回った。2015/2016\*\*シーズンは、第 52 週（定点当たり 1.13 人）に流行開始の目安である定点当たり 1.00 人を超え、例年に比べて 2 週間程度遅れて流行が始まった。年齢階級別では 20 歳未満が全体の 68.6%、10 歳未満が 48.9%を占めた。

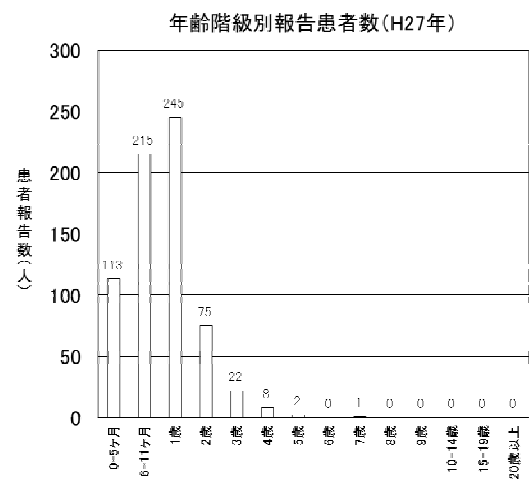
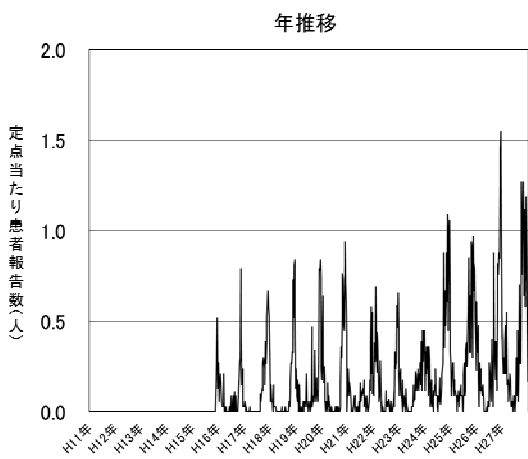
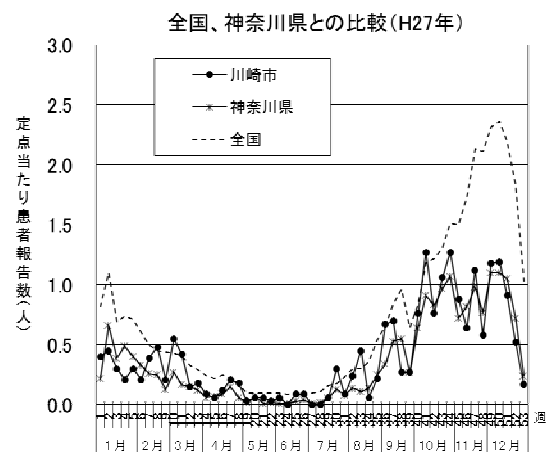
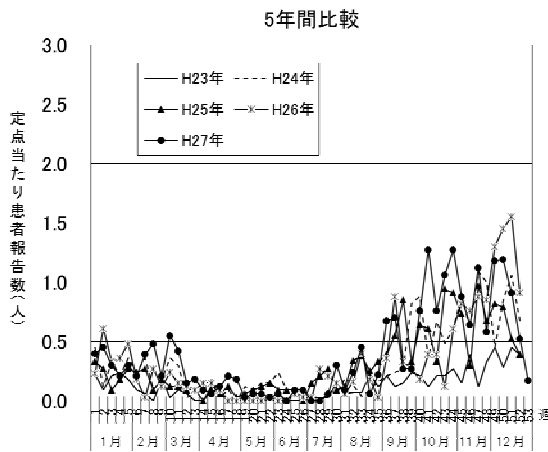
\*平成 26 年/平成 27 年に相当 \*\*平成 27 年/平成 28 年に相当



(イ) 小児科定点把握対象疾患

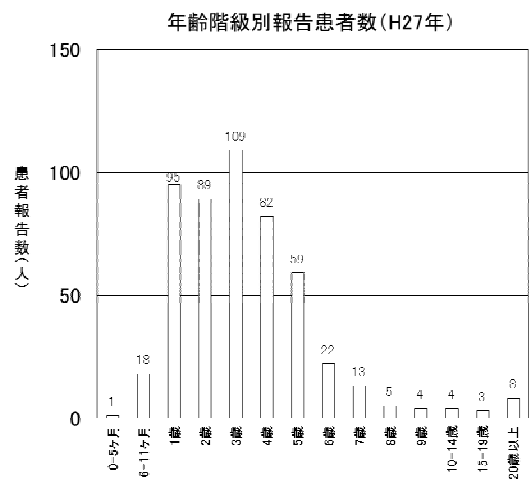
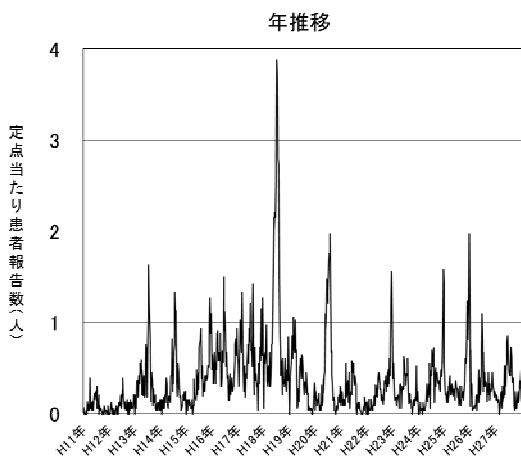
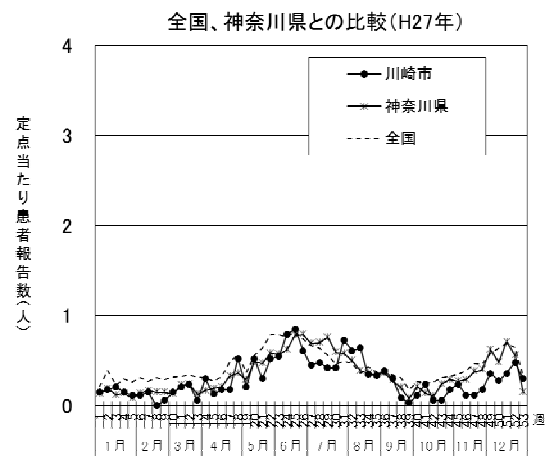
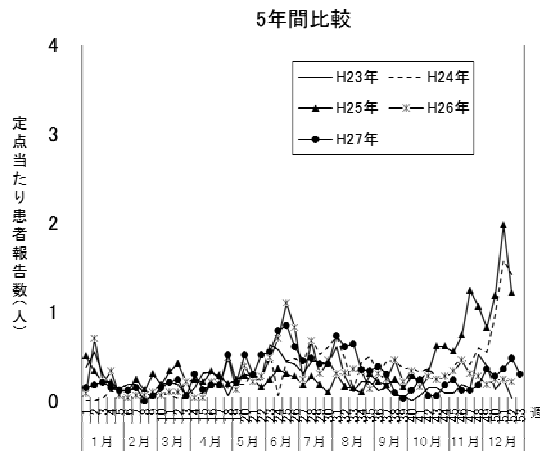
a RS ウイルス感染症

平成 27 年の累積患者報告数は 681 人、定点当たり患者報告数は 20.97 人で、前年 (17.26 人) と比べてやや増加した。8 月以降患者報告数が増え始め、年末にかけて例年より高いレベルで推移した。定点当たり患者報告数の最大値は第 41 週及び第 44 週 (1.27 人) であった。年齢階級別では 1 歳が最も多く、1 歳以下が全体の 84.1% を占めた。



b 咽頭結膜熱

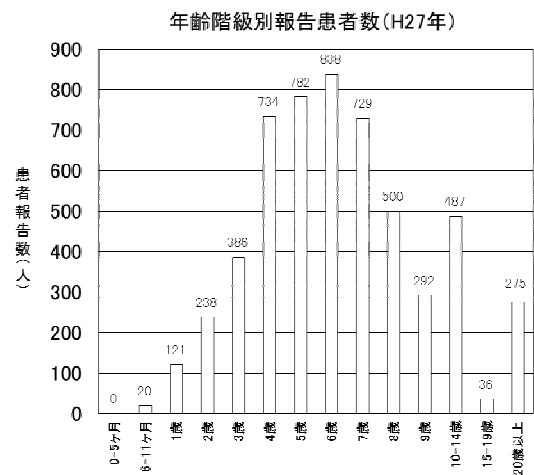
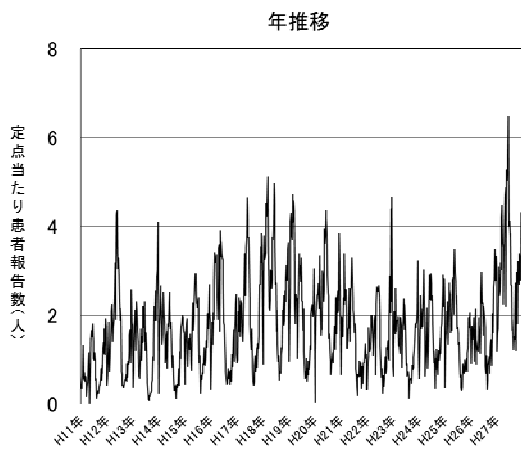
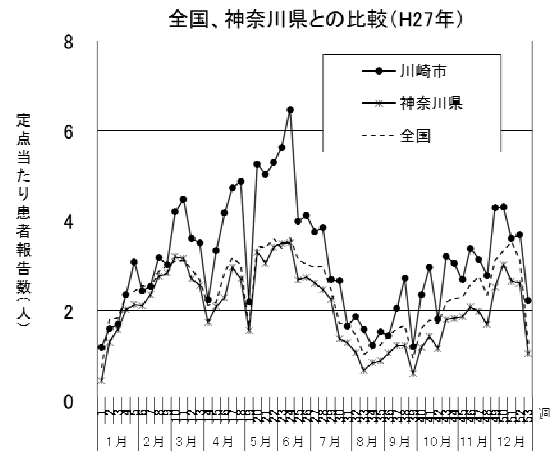
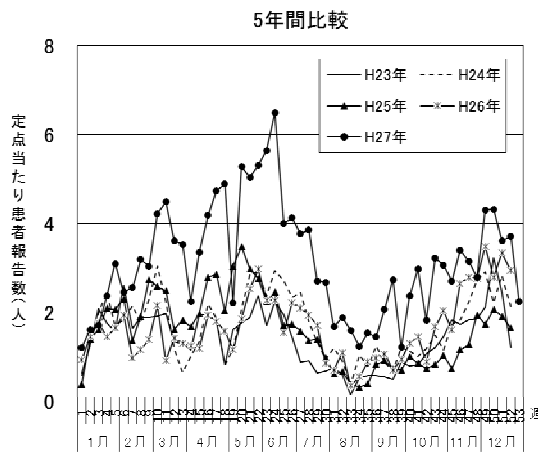
平成 27 年の累積患者報告数は 512 人、定点当たり患者報告数は 15.81 人で、前年（14.84 人）と比べてやや増加した。夏期に患者報告数がやや増加し、定点当たり患者報告数の最大値は第 25 週の 0.85 人であった。なお、平成 24 年及び平成 25 年にみられた冬期における流行は前年に引き続き認められなかった。年齢階級別では 3 歳が最も多く、1-4 歳が全体の 77.0%を占めた。





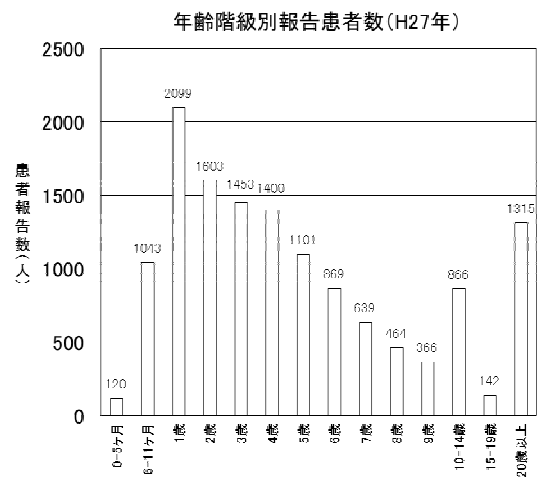
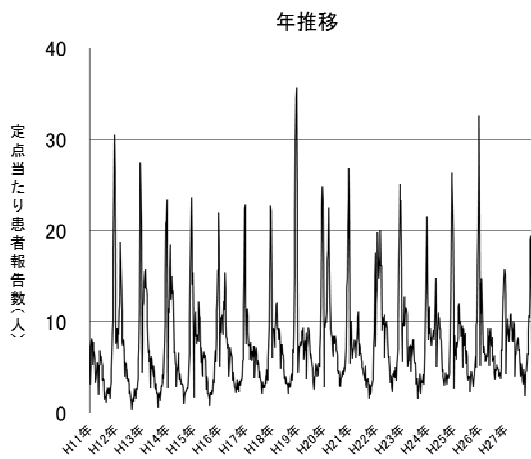
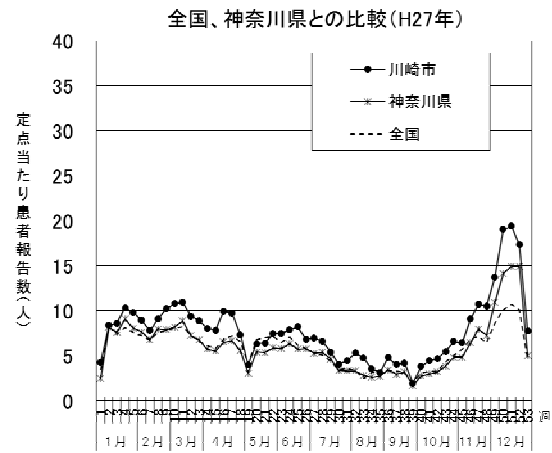
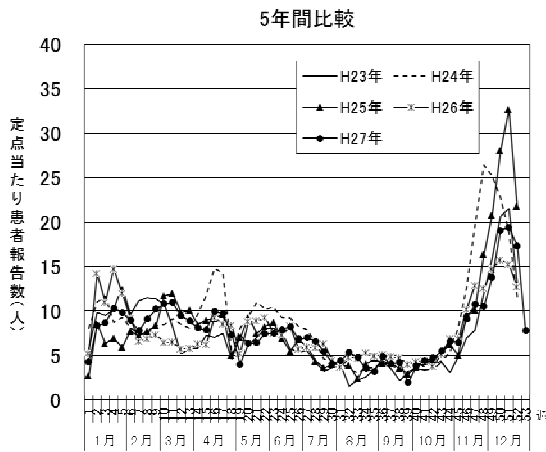
c A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

平成27年の累積患者報告数は5,438人、定点当たり患者報告数は166.34人で、前年(86.46人)と比べて大幅に増加した。年明けから例年よりかなり高いレベルで推移し、定点当たり患者報告数の最大値は第24週の6.48人で、平成11年のデータ収集開始以降、最多の報告数であった。年齢階級別では6歳が最も多く、4-7歳が全体の56.7%を占めた。なお、平成27年の劇症型溶血性レンサ球菌感染症の届出は7件であった。



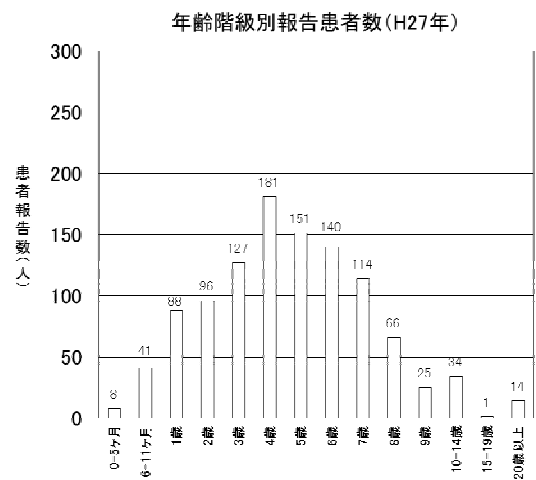
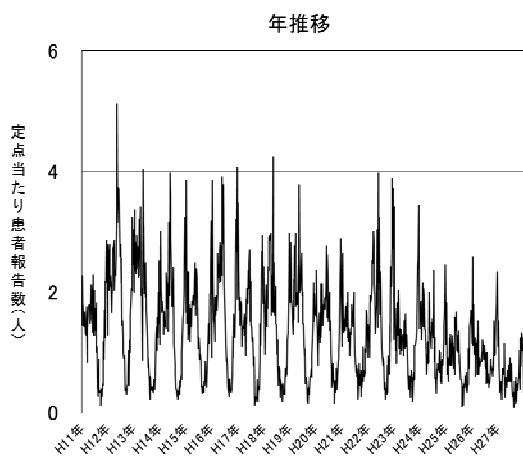
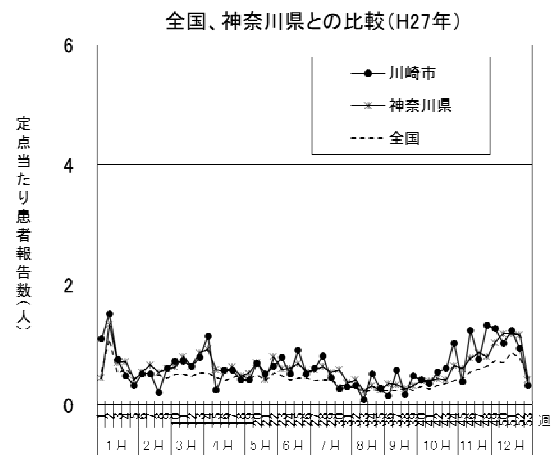
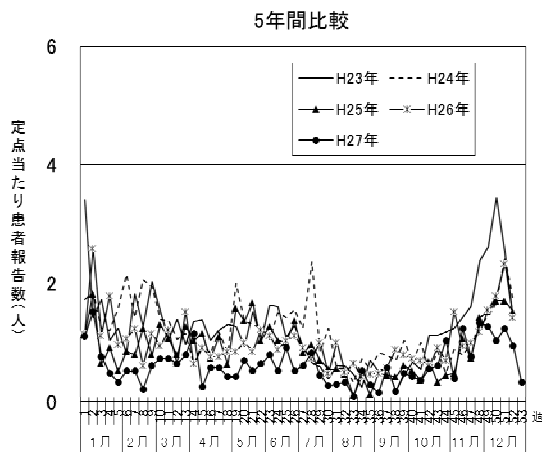
d 感染性胃腸炎

平成 27 年の累積患者報告数は 13,480 人、定点当たり患者報告数は 413.57 人で、前年（400.87 人）と比べてやや増加した。年間を通してほぼ例年並みのレベルで推移し、定点当たり患者報告数の最大値は第 51 週の 19.39 人であった。前年に引き続き警報基準値（定点当たり 20.00 人）を超えた週はなかった。年齢階級別では 1 歳が最も多く、5 歳以下が全体の 65.4% を占めた。



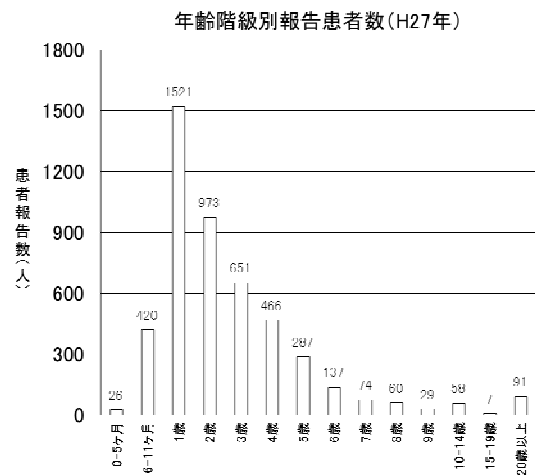
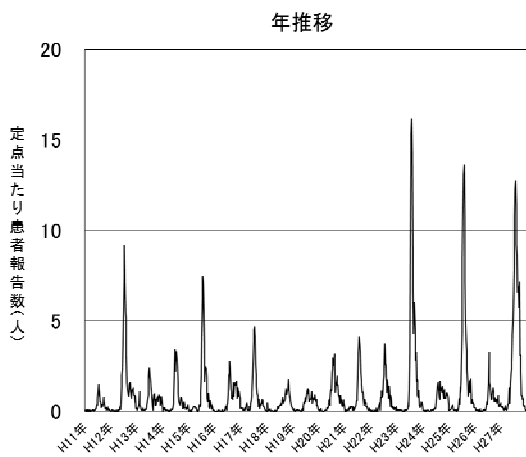
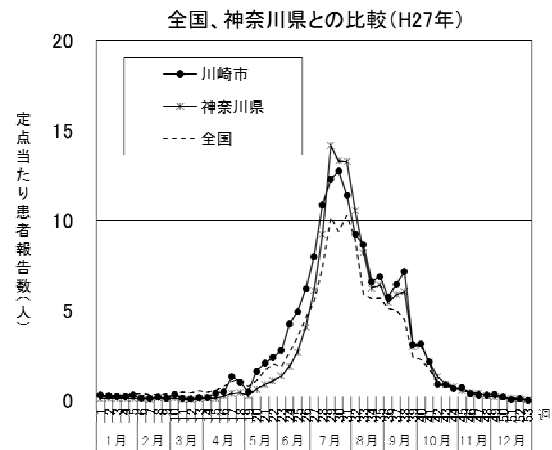
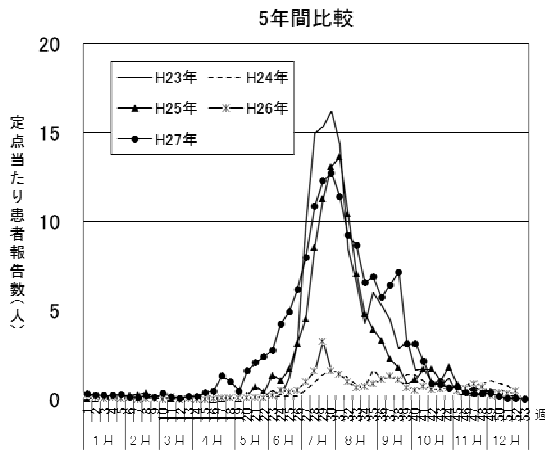
e 水痘

平成 27 年の累積患者報告数は 1,086 人、定点当たり患者報告数は 33.50 人で、前年（52.23 人）と比べて減少した。第 2 週に定点当たり患者報告数の最大値（1.52 人）となったが、年間を通して例年よりかなり低いレベルで推移した。平成 26 年 10 月 1 日から、小児に対する水痘の定期予防接種が導入された影響が示唆される。年齢階級別では 4 歳が最も多く、3-6 歳が全体の 55.2% を占めた。



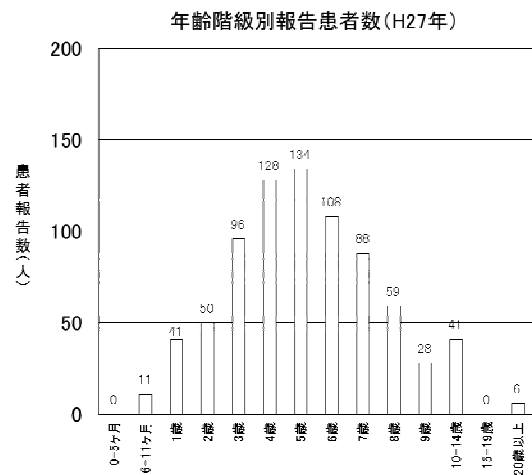
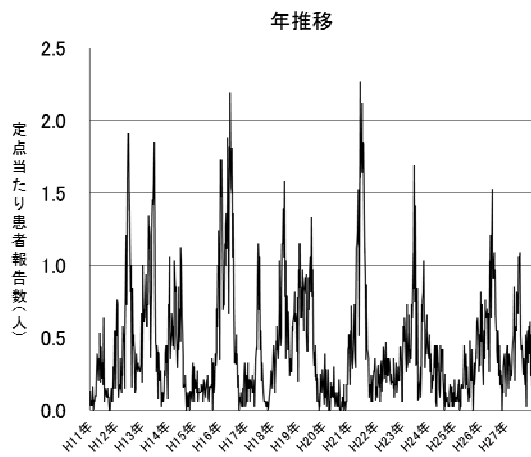
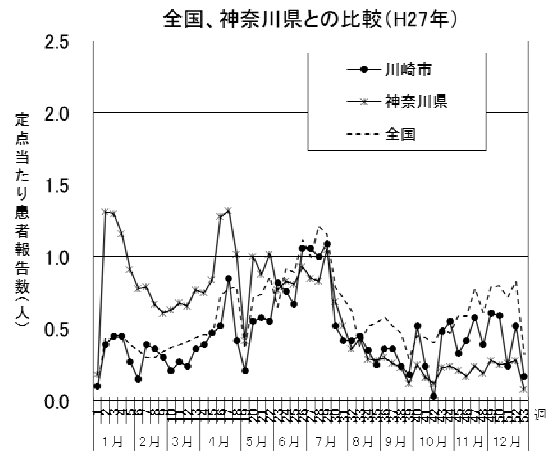
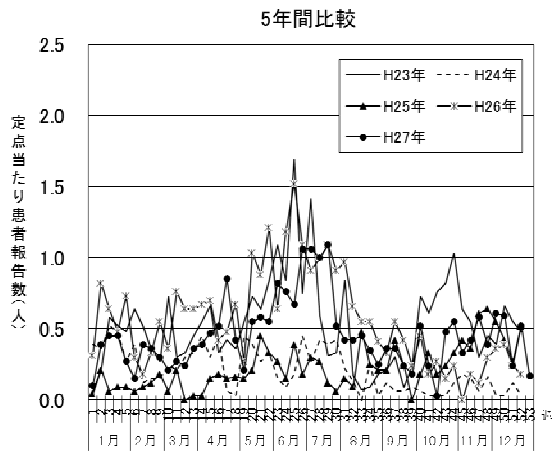
f 手足口病

平成 27 年の累積患者報告数は 4,800 人、定点当たり患者報告数は 149.04 人で、前年 (26.61 人) と比べて大幅に増加した。4 月下旬頃から例年よりかなり高いレベルで推移し、定点当たり患者報告数の最大値は第 30 週の 12.73 人であった。年齢階級別では 1 歳が最も多く、5 歳未満が全体の 84.5% を占めた。



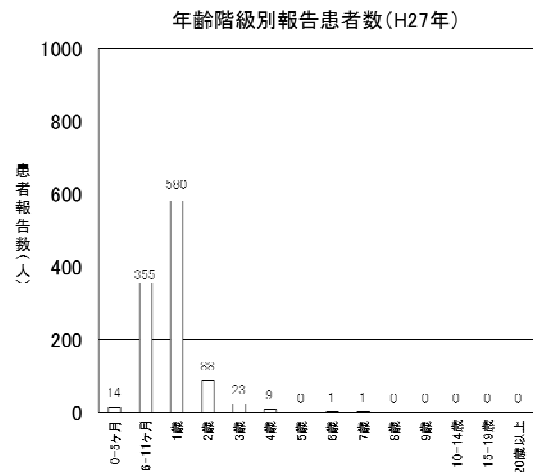
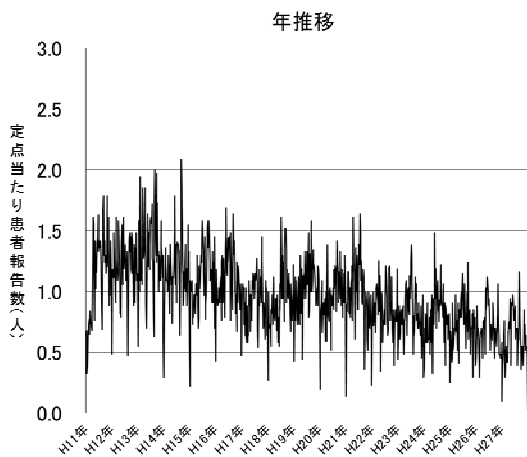
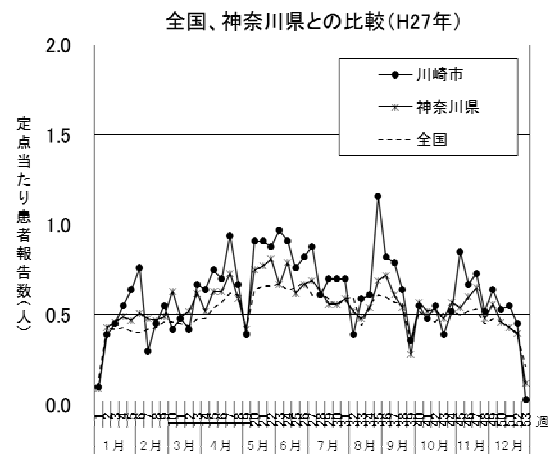
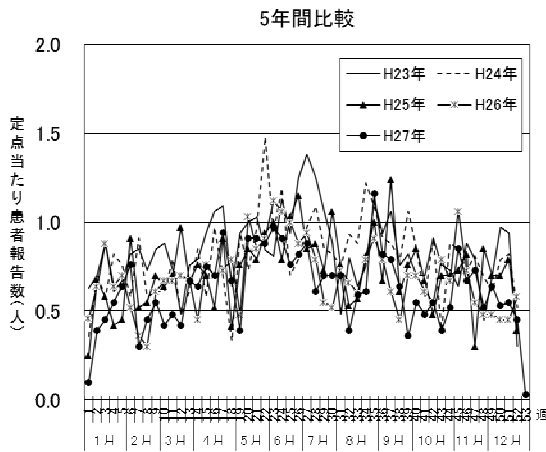
g 伝染性紅斑

平成 27 年の累積患者報告数は 790 人、定点当たり患者報告数は 24.16 人で、前年 (29.15 人) に比べてやや減少した。6 月下旬から 7 月中旬にかけて例年より高いレベルで推移し、定点当たり患者報告数の最大値は第 29 週の 1.09 人であった。年齢階級別では 5 歳が最も多く、3-6 歳が全体の 59.0% を占めた。



#### h 突発性発しん

平成 27 年の累積患者報告数は 1,071 人、定点当たり患者報告数は 32.84 人で、前年（35.72 人）と比べてやや減少した。年間を通して目立った流行は認められず、ほぼ例年並みのレベルで推移し、定点当たり患者報告数の最大値は第 35 週の 1.16 人であった。年齢階級別では 1 歳が最も多く、1 歳以下が全体の 88.6% を占めた。



i 百日咳

平成 27 年の累積患者報告数は 24 人、定点当たり患者報告数は 0.72 人で、前年 (0.12 人) と比べて大幅に増加した。9 月以降報告数が増加し、定点当たり患者報告数の最大値は第 45 週の 0.12 人であった。年齢階級別では 20 歳以上が最も多く、全体の 50.0% を占めた。

